

列車に搭じ歸神せり。

六月十四日（火曜、天氣曇）

去十一日より入梅なればにや、朝來曇天、晴れては曇り曇りては晴れ、大に快ならざる天候、果ては夕方より小雨至れり、忽ちにして又止みつ。

今夜就蓐の時不圖見れば、枕邊の障子に螢一疋優しげなる光をもらしつゝあり餘りの可愛さに、靜かに捕へて庭前の植木に放てば、喜々として飛び去れり。

七月十日（日曜、天氣晴）

午前五時曉起衣を更め、六時店を出て車して山口氏宅を訪ふ、七時の列車にて鹽屋の山口氏親族正木氏を訪ひ、揚梅採りに終日を費さん約あればなり、七時に至るも同伴者前田令室一行の用意出來ざる爲め、八時三十分の列車に搭ずることゝなれり、同行者は山口、前田兩令室、山口京子、宗平、孝、正夫、前田辰雄諸子息と余の八名なりき、九時鹽屋着、正木氏宅まで一町餘の處を三々五々歩を移して同宅に着せしとき、朝來稀有の美晴にて暑氣甚だしかりし爲め流汗淋漓たり、余は先づ正木氏一同へ初對面の辭了つて後衣を脱して風を納れ、椽先に据して田舎の風色に恍惚たる久し、それより同宅の上手に在る前田令室の里某家

に至り、同じく飽かぬ野色を眺めて日頃の俗神を醫したり、本日來鹽の主旨たる揚梅採りに上らんとて、同宅にて一同食事を爲し、一同浴衣がけシヤツがけにて將に山に上らんとする矢先、神戸より前田令室の知人三名來會、同行者益々賑はしくなり、同宅より五六町を距る山に上り揚梅採りに従事す、見渡せば波靜けく白鷗眠る紀淡の海は、千百の白帆を浮べて近く眼下に迫り、心憎きまでの涼風勢すさまじく衣袂を拂つて冷氣肌に迫るが如く、斯の山海の風景を我物顔に、頭上近き揚梅の枝に上り枝を撓めて思ふさま揚梅實を飽食する蓋し古今獨歩と謂ふべし、腹は揚梅にて滿ち、携へ來れる四五の籠は梅實を以て堆し、最早此上の望はなし、いざ歸らんと各自十二分の喜色を面に現はし、嬉々として歸宅し、余は神戸より同じく來られし三人の人々と共に、正木隱宅の方にて馳走になり、それより山口氏息等と共に海水浴を試む、了つて正木氏方に歸り、携へ來し五種の新紙を横臥して閑讀す、其快さ譬ふるに物なし、加ふるに同行せし未來の妻たる京子は、始終余の傍らに在りて諸種の注意を與へ、正木氏宅の庭前日蔭の處にて對座四方山の閑話に耽り、舊を談じ今を語り趣味津々盡くる所を知らず、午後五時頃に至り余は再び水浴を試み、小憩

の後七時三十分の列車にて歸神せんとし、夫々用意を爲す、これより先き三人の神戸の人(前田、木谷、中島)等は已に歸途に着かれぬ、七時過に至り兩家に別辭を述べ、立出でんとするに當り、正木氏より余が神戸より土産としてビスケツト一罐を贈りしに酬いんとて揚梅二籠を惠まる、其外山口、前田兩家への進物澤山なり。

ステーション迄は見送り人多く、數多き揚梅の籠も何の苦なく列車に積込みしも、八時神戸ステーションに着せし時は、各自夫々得物ある中にも、京子と余とは兩手に重き籠を提げ、流るゝ汗をも拭ひ敢へず、息急しく改札口に辿りホツト大息す。其時のつらさ、併し意中の人と共に其苦を同じうす、苦しみも自ら其撰を異にせり。車を傭ひ歸宅せしが、余だけは車上に揚梅の枝と籠入を抱きしたため、白足袋には時ならぬ紅葉を散らせり、女ならば見榮え宜しからざるも男には何のことなし。

山口氏宅にて沐浴一番、身體爽かに、京子嬢の勸むる氷一皿に滿身冷かなるを覺え、十時迄庭前風通り、良き處に安居して、令室令嬢を相手に本日の壯遊を語り時の移るを覺えず、此時熊野神社砂持祭事の屋臺賑しく囃し立て中々の景氣なり、午後十時半頃車して歸店す、此時鹽屋にて貰ひし揚梅二籠を受取り歸り、一は谷氏宅へ

一は主人へ贈れり。

八月七日（日曜、天氣晴）　昨日は非常の熱さにて日中は座に堪へ難き程なりしに、本日も亦劣らざる暑さ、なかなか堪ふべきにあらず、午後零時頃より三時までは漆喰場近くに腰掛け、少しく風通りよき處にて涼を納るゝこそせめてもの樂事なれ。

今朝午前五時に起き、金子、智積寺兩兄と共に諏訪山温泉へと志す、途中柳田、下田二氏を誘ひ、先づ朝陽漸く輝かんとする頃十分の快浴を試み、それより田中樓に上り昨日より喋し置きし蓮飯を喫せんとす、二階第一室眺望最も佳なる處に五六鉢の牽牛花を並べ、太陽は擅に赫々たる光輝を發射す、須臾にして配膳となる、生來初めて口に上す蓮飯、そも如何なる味なるやと待ちに待ちたることなれば、箸を下すこと雨の如く、副菜には鯨の味噌汁、ハモの煮つけ、玉子のフワ々々等ありしも、朝食しかも風雅なる蓮飯の菜としては寧ろあらずもがなと思ひぬ、午前七時頃歸店す。

八月二十一日（日曜、天氣晴）　本日は日曜なれど朝より彼是れ商用多々にして、分けて旬日の内に迫りし新宅の準備にいそ々々忙し。

九月四日 (日曜、天氣晴) 本日下山手六丁目の梁田仕出し屋を呼び寄せ、主人並に今度小生新宅の祝として店員一同より舶來小絨氈を惠まれしに酬いるため、折詰を注文し、午後四時迄に持込むべきを命ぜり。

九月九日 (金曜、天氣晴) 昨夜若島の持參せし門標は四角皆落しありしが金子兄一見してこれは門を落すこと不吉なりと云はれ、依て早速大工に命じて削り直させ、姓名を記せり。

九月二十二日 (木曜、天氣晴) 今朝は又非常に冷氣を催し、慌て、ネルの單衣を捜し出せしぞ笑止なる。

「朝寒に獨座の襟を正しけり」

十一月十二日 (土曜、天氣晴) 午前中店務を了へ、十二時半過より歸宅す、折りしも父は本日國元より來神せらるべき親戚の迎へに、とて赴かれ不在なりき、午後二時頃今津より今井三藏、西川文七並に西川榮二郎の三氏來着、父は尙京都より建部、北村、安永の三氏着神を待つとて三宮ステーションに留まり、二時半過三人着神なきにより歸り來らる。

余は父に代りて二時五十四分の列車に以上の三氏を迎へんとて赴きしに、暫くありて北村五三郎兄の慌しく車を飛ばして余を呼びに來らるゝに會ふ、余は異様の思ひを爲しつゝ、歸宅すれば、己に京都よりの三氏は神戸ステーションに着し居られしなり、一同へ挨拶了り、種々の準備を爲し、八時頃より室内の整理を爲し、新婦を迎ふる用意す、午後十時過に諸式事を濟ませたり、此間の混雜名狀すべからず。

十一月十三日（日曜、天氣晴）　本日は部屋見舞の受納並に配贈に忙しく、殊に山口方にて近隣の知家を招きて懇親の杯を爲すにより、余其席に列して瀬鴻、水野、南安藤、小西、須方等諸家の主人並に婦人方に初對面の挨拶を爲し、午後六時頃に至る、夜に入りては中々の盛宴となり、國元の親戚は明午後歸途に上る筈なれば歸装を整ふるに忙しく、午後十時前一同就眠す。

## 明治三十二年日記拔萃

七月三十一日（月曜）

忙しき晦の仕事を了へて午後九時歸宅し、食後自適晝

間の疲れを醫し、やがて褥に入らんとするとき、店より房吉車して來り、歐文電報發信方に付て二時間後に來店あれと云ふ、余は和文にて差支なくば和文にせよ、若し歐文でなくては叶はずば原文持參せよと申送りしに、再び來りて長文のものなれば來店ありたしと、依て車して至りしに、金子兄起草中にて、小松兄は其用事にて終列車にて上阪中なり、彼是する内店は皆臥褥し、余は孜孜として執筆し、午前一時半頃に至りて十三ページ七十三音信のものと、二ページ十二音信のものと二通を拵へ、打電の後歸宅すれば午前二時を打つ。

八月七日（月曜、天氣晴）　暑さ甚だしく温度昨日に劣らず、金時計の飾りものたるハート形の寫眞入に、小形の肖像を拵へ入れんものと思ひ、店員本田兄が市田寫眞師方に友人あるを幸ひに、余の寫眞を託して依頼せしが、自ら己れの肖像を携ふるも妙ならず、依て父の肖像を小形に複寫せしめ嵌入せんことす。

八月二十三日（水曜、天氣晴）　午前三時半頃に不圖眼を覺ましたるに、隣りの猫二正來りて蒲團の上に這ひ上ること一再にあらざ、サンザン手痛く懲らし遣り居る内、目さえて再び眠る能はず、やがて又新日報を配達し來りしにより、青燈一

穂の下に讀了し、彼是する内午前五時となる、依て褥を出て、暫し椽側に横はりて讀賣の黒百合を初段だけ讀み、急に諏訪山の温泉へ行きたくなり、タオルを手にして出づ、田圃路のみを取りしに早朝の風物目に喜ばしく、兼ての素志果し兼ね居りしに、今朝初めての決行に自ら氣も引立つ、至れば増田、古川の二氏も已に浴しつゝあり、冷浴二回温浴二回にして出づ、歸るさ日は漸く東天に上り、燦爛たる光輝身は仙境に在るが如し、壹圓を投じて湯札三十葉を求む、歸りし時は六時、それより朝日讀賣二紙を讀み、食後車して店に出づ、

十月一日（日曜）

本日は小部村の茸山に赴く筈なるにより、午前八時店に出

でしに、已に一行は出立後なりき、依て車して一同の待合せ所なる天王谷祇園社の茶店まで至りしも在らず、已むなくそれより車を捨て、歩む路にて草鞋一足を求め勇を鼓してドシ々々進み、十町餘も至りし處の一茶店にて追附けり、此處にて休憩の上一同進行す、主母夫人等女連三四後より車して來會せらるゝ筈なるも見えず、余等は大に進んで西小部村を距る十四五町なる坂道の絶頂なる地藏尊の石垣に踞して待つ、此處にて總員揃つて進む、西小部の森本某方に落合ひ茸山に登る、茸



狩の壯遊を試みての後、席を設けて各自任意の娯樂を擅にす、松茸の鹽焼又は焼立て、麥酒、日本酒を酌み、一時は非常の大騒ぎを演じ、最後に出來損ひの松茸飯を已むなく一二椀食し了り、十分の快を盡し午後三時過山を下り、再び森本にて憩ひ、各自散じては合し、合しては散り、勇ましく歌ひ喧しく談じ、余は石田、三輪、高橋の三人と共に、先着として店には赴かて直に歸宅す。

十月二十九日（日曜） 午後宇佐美を訪ふ、一昨日見し菘翁の山水は月仙、芦雪二幅を返却して買取ることゝせり。

十一月十一日（土曜、天氣雨） 朝曇る、八時過より雨となり終日止まず。

本日は主家新婚結納披露式あり、朝より賑ふ。

十一月十二日（日曜、天氣晴） 午前は愈々高砂松本家へ結納品持込む爲め余は召されて奥に至り、目錄外二三點の執筆を爲す。

午後六時前に歸宅す、恰も本日は余の新婚の一周年に相當するを以て、前田氏二方、山口祖母、兩親並に大慈兄等を招きて、聊か祝宴を催さん筈なり、膳部出來しも前田氏の來訪遅きにより午後八時過より始まる、他人入らずの内輪同志相會して祝

杯を傾く、快之に勝るはなし、子供等にも相應の馳走を爲せり。

十二月十日（日曜、天氣晴）正午過宇佐美を訪ひしに、仙嶺應舉の前書の虎一軸、細長き畫紙に前足と首を大きく畫き、尾の端を上に一寸見せし頗る面白き意匠にて意に満ちしにより求む、閑なるまゝ久々にて京に琴を彈ぜしめ神樂始め、千鳥の曲、夏の曲、萬歳などを聽く。

十二月十一日（月曜、天氣曇）曉起雨聲を聽く、店へ出るとき少しく雨降る幌を蔽ふ程もあらず。

本日の日本新聞社説に「年少喫煙の害」と題する一篇あり、殊に衆議院へも同法案提出せらるべき由なるに付、芳太郎を呼び付け之を讀ましめ、尙其論文を切り抜きて机前に貼付せしむ。

十二月十三日（水曜、天氣晴）朝店に至り、机上に堆き各地よりの來翰を一一點檢し、夫々返信して後新紙を讀むこと例の如く、やがて正午となり、食事例刻に遅るゝこと一時間餘。

これより先き宇佐美氏來りて二三品見せたきものありと告ぐ、床友より歸りて

食事の後同人方に至る、吞舟の雨中山水、竹堂の虎、文麟の松、靄厓の山水、文晁の富士等あれど、吞舟の雨中山水尤と稱せらる。

十二月十四日（木曜、天氣晴）　鏡花の湯島詣なる新小説は中々の傑作と云ふことを智兄に聞いたゆゑ、今朝小供を日東館に遣つて買はせた。

朝は手紙も来ず用事が無いので、十一時前迄新聞を読み、七十番へ出掛けた、これは樟腦代の殘金を受取るためじや。

夕方まで湯島詣を閑讀した、今夜は地方の仕切五六口せねばならぬのがあるが斤目の分らぬので一寸手暇である、依て七時前から湯島詣を引續き讀んだ、帰宅して朝日新聞を読み、それから年賀狀用の葉書の表書丈け五六十枚書いた、何時も十時に風呂に行くのであるが、折柄風出で霞も降つて來たので止めた。

## 明治三十三年日記拔萃

一月二十八日（日曜）　差掛りし用事もなく、午前中は新聞を亂讀す、今夕は闇

汁會の催しありこのことで、各自思ひ々々の買物を爲すことゝなり、一人前十錢宛を充てがはれた、余は午後より床友に至りて散髪し、それより歸宅の上魚信を問合して、鯛の頭の見事なるを求めさせた、三時限りと云ふので、それを店へ持參して主母夫人へ差出し、午後五時頃に闇汁會が出来上る、何様未聞の珍會にて、其味なかなか捨てたものにあらず、三椀を傾けたり、今夜は余の誕生日に當るので、一同へ馳走をした。

二月七日 (水曜)

相變らず春寒料峭、庭前の水鉢氷結して用を爲さず、側の鐵棒をもて打碎き、漸くにして便ずるに至る、正午過床友に至りて散髪し、歸來店用に忙しく、四時前西岡宅に至り、昨日の返禮として味附海苔一罐を贈れり。

宇佐美を訪ひしに、昨日京より買入れ來りしものゝ中にて、月仙の蘭亭曲水、文麟の夏夜(芦に螢)ありしも、何れも已に他へ賣却せし由なり。

清人の衣裝入れにて書畫の幅を入れるゝに最適當なる皮のカバンあり、錠前二ツを揃へしめて求むることゝせり。

午後六時前に宅より電話にて、今午後神戸署の巡查四五名來宅、盜賊忍入りて衣

類十二三點を竊取せられしことなきやと問はれ、一向覺えなきこと故さることなしと答へしも、強ての尋ねに、念の爲めにとて突當りの男タンスを検べしに、三四の引出二本共空となり居りたり、餘りのことに驚きしが、其物品は神戸署に一點も不足せず保存しあれば、直に受取に來れしことにて、余に午後一二度電話掛けしも不在のため、山口父に代りて出頭して貰ひ、恙なく其品は受取來りし由、歸宅の上聞けば、其賊は道側に在る山口の厠より忍入りしものにて、京が昨日午後大慈宅へ頼母子に行きし不在中を窺ひ入り込み右の衣物を奪ひ、途中にて風體の怪しきより其筋へ逮捕され、終に自首せしものなりと云ふ、恙なく物品は吾手に戻り幸なりしが、畢竟京が宅を空けて省みざりしが一主因なれば、痛く將來を戒め、尙留守番として兵庫に在る一人の老婆、こは山口母堂の幼少の時に愛せられ、其後年に四五度も山口方へ來り、京を吾孫女のやうに愛する人、に至急來て貰ふことに定め、尙神戸署の特務へは其名前分り次第相當の謝禮すべき筈、一時盜まれしは、十三點にて、概算百四五十圓のもの。

三月六日（火曜、天氣晴）

昨夜不在中大阪の小間物屋來り、兼て註文せし品

々持參せり、今朝再び訪ひ來りしにより、註文品の外に、青ロウカンと云ふ緒メ十八金鈴附の小形古時計一個と、外二三品を求め、尙余の指環仕直し、葦入金物環座調製を依頼したり。

三月七日（水曜、天氣晴）朝店にて金子兄より、本夜大阪岸松館にて開かるべきラスベ商會の宴席へ、主人の代として列すべき旨話されしも、右は催主の意に悖り、殊に他人の代として酒席に列するは余が常に屑とせざる所、斷然其意を謝せしに、石田氏代つて列することゝなれり。

午後一寸宇佐美へ至りしが、何も見るものなくて匆々歸れり。

歸宅すれば東京畫報社より、註文の臨時増刊美術畫報一冊送付し來れり、食後火を圍みて京と共に之を繙き、それより京に御國の譽、千鳥の二曲を彈ぜしむ。

六月九日（土曜、天氣晴）午前金子兄の依頼により、大阪神戸に於ける再製場の取調書十數葉を認めたり。

午後同上、日東館よりほごゝぎす一冊を持參せり、閑を見て精讀す、就中寒川鼠骨の新囚人と題する實見談は、一入の趣味ありて面白く讀まれたり、俳句狸毫小楷を

求む。

午後五時より宇佐美を訪ふ、江波戸氏ありて雑話し、六時過店に歸る、八時歸宅す途次宇佐美を訪うて金石と小華の二冊、惟朱軸筆一枝を求めたり。

六月十四日（木曜） 今朝宇佐美へ茶卓二種を持參し、車夫に昨日求めし箱入の茶卓を持たせ歸らしめたり。

午前中は仕切發送に忙しく、午後二時頃までに六種の新聞紙を閱する例の如く、廳て臺灣より高平某氏歸神し、其便に大崧嶽に在る小松秀吉より余にこて、竹のパイプ一本贈り呉れたり、優しき志は千萬に受け、夕方直に禮書を裁し、金五圓を封入して書留にて出狀す、夕方宇佐美に至る、歸宅すれば父大阪より書を寄せ、伯母みな子無恙岸本家へ勤めることとなり、同家にては普通の奉公人と其撰を異にし、内室の代理を爲さしむとの手厚き言葉ありたりと云ふ。

外に大阪なる幸吉より來狀、安達兄の跡を追ひ渡臺したしと云ひ來れり、依て其不心得を論したる出信を爲し、父へは返書を贈り、伯母へも出狀したり。

今夜にて風葉の戀慕ながしを讀み了る。

六月十七日 (日曜、天氣晴) 本日は店を休む、車夫を使して其旨を通じ、歸途

宇佐美へ立寄りしめ、昨日約定せし松の一鉢と外三點を受取り來らしめたり。

朝日新聞紙を讀み、それより湯島入浴中なる山口岳父の許へ文通したり、次で昨夜の來書に答へ、父の許へ文通す。

本日は京の誕生日にて、聊か心祝ひとして家内一統へ會席を馳走す。

文之介午後二時半頃突然來訪す、種々雜話の末六時半頃歸れり。

折柄父より來書、文之介入寓の件と、ゆか子縁談の件と、主なる用事なるを以て、更に一通の返書を裁したり。

七月二十三日 (月曜、天氣曇) 今朝晏起、古川氏より使來り、昨夜見せし眞美

大觀二冊借用に來る、依て直に渡したり。

朝より蒸暑く、店へ出てしが午前非常に忙し、

午後五時過に至りて小閑を得、宇佐美來り表裝の出來上りしを告ぐ、依て直に訪問して五幅とも見しに、中々見事に仕上りたり。

金子兄に臺灣夏帽子一つを申受け、歸宅の途次宇佐美へ立寄り、表裝分と外に大



徳寺納豆少許を贈られ、持参し歸る。

父の一行未だ來神なし、多分妹はま子未だ故郷一步も離れしことなきゆゑ、大津京都等見物せしむる爲め、延引せしならん。

古川より大觀二冊持参したり、文五郎より來狀、芳太郎着阪の模様通知し來る、北村兄より寫眞の禮狀來る、依て文五郎と北村へ出狀す。

八月十五日（水曜） 昨今山手の湯屋は、浴客目切減少せしため午前中は休業

す、依て余は止むなく、今朝より諏訪山の温泉へ行くことゝす。

四時四十分過目覺め、雨戸を明け、匆皇として諏訪山へと志す、昨夜より今朝へ掛け、舊二十一日の大師詣りにて、再度山へ上る、老若男女踵を接する賑はしさ。

本日暑氣甚しく、昨日より引續きての炎熱にて九十三四度に上る、夕方宇佐美を久々にて訪問し、黒柿蓮根形の如意一本を求めたり。

八月二十六日（日曜） 本日は文五郎の來神を待合せ、京を携へて舞子濱に遊

ぶ企てあり。

朝來雨至り大に氣に掛りしに、幸ひにして晴れ、午前九時十二分の列車にて出立

す、龜屋に投じ、休憩の上海水に浴し、日頃の鬱を散ずるを得たり、此日風あり波高しされど見違ふ計りの晴天なれば、淡路島指呼の間に在り、呼べば應へんさす、二回の海水浴を取り湯を浴み、高樓涼風の驚くべき勢にて吹き來る處、横臥して閑談に耽る、快譬ふるに物なし、舞子焼四五點を求めて家苞とし、午後八時十二分の列車にて歸神す、乗客非常に多く、一二三等とも満員立錐の地なく、己むを得ず一等列車の入口に立ち神戸に至る、文五郎は十時七分にて歸阪せり。

九月二日（日曜、天氣晴） 本日は店員十餘大擧して舞子濱へ一遊すべき筈

にて、七時店に參集する手順なれば、夙に起き七時前に至りしに、こは如何に、店員緩々構へ、八時三十分の列車なりと云ふ、仕方なく休憩の上小僧三人を先發として遣し、余は柳田、三輪、弘内、高橋、高恒の五人と共に出立ち列車内に入りしに、發車前に至り、京も三弟を拉して余の許しにより、汐屋の正木方へ行かんとして來るを見る。

龜屋に入りて海水浴、乘馬、玉突、大弓等の遊びを爲し、近來の快を盡し七時十五分の列車にて歸神す。

神戸ステーションに下りて始めて京等の一同も同じ列車にて歸りしを見る、上

野氏の二人も須磨へ赴かれ、同じ列車にて歸られしなり。

十二月十四日（金曜、天氣晴）今朝父國元より小包二個の着報を寄せらる

兼て大阪にて求めし巴里大博覽會寫真畫本十冊は、主人へ歳暮祝儀として進上の積りなりしに、此度は一切贈酬廢止のこととなりしにより、今朝店へ持參して唯進上の體にすべき筈、朝の内は閑、午後同上、夕方海龍亭にて晚餐を爲し、それより宇佐美へ至りしに、福壽草は鉢植出來居れり、夜七時歸途に着く、福壽草を持歸れり、歸宅すれば岸本より、余の請求事件なる一萬五千圓だけ定期預、二錢五厘日歩の口は承諾の旨申來れり、依て直に一兩日中に參上すべき旨返答したり、芳太郎明十五日より試験にて今夜も簿記の問合せに來訪す、山口母堂も來訪せらる、京未だ歸らず午後十一時前門前車聲轟々たるあり、深夜誰人の訪づることかと思ひしに、京、京より歸る、彼是雜話し十二時過に至る。

## 明治三十四年日記拔萃

二月七日（木曜） 朝店に至りて臺北へ金の電送を爲し後は閑、金子兄本夜を

以て婚儀の典を擧ぐ。

二月八日（金曜） 天氣晴 朝方晴天なれども寒氣強く、午後二時頃雪降る、暫くにして止み、夜に入りては星斗亂點、明日の晴天疑ひなしと思はる。

午前例の如く閑散、主人東京より歸店す十一時半、蓋し西田氏危篤の爲め呼戻せしなり、午後宇佐美を訪ふ、來客交々至りて談話要を得ず、匆皇として辭し去り、床友に至りて剃髯、歸店後經濟雜誌を讀む、本夜は自由亭にて金子氏の新婚披露あり十五六人招待せらるゝ筈なり、午後六時過より店を出て、金子兄の新宅を叩きて新婦に對面し、それより自由亭に至る、八時散會す。

二月十四日（木曜） 今朝十時出帆の佐渡丸にて岩藏氏香港へ行かるゝに付麻の手巾一ダースを餞別として贈る、丁度店に至りしときは出發の間際なりしを

以て、同人等と共に會社待合所に至り、休憩の上ポ―トにて佐渡丸に達し、十時前分れて歸店す、午前開、午後より元町子供屋に至りて金巾紺足袋五足を求め、外に兩ぐり下駄一足を購ひ、其時まで穿ちし下駄を臺替へせしめたり、それより歸宅、文之介より來狀、半助と云ふ者を本日午後立寄らしむべし云々、夕方に至りて又來狀、明日に延期したりと、父より來狀、來十六日夕大阪に入り、十七日西田の會葬を了へ、同夜は一泊、十八日來神の筈、文之介へ返信の序に此事を通知したり、六時前店に至り七時去る、歸途宇佐美を訪ひしも來客多くして要を得ず、歸宅す。

三月九日（土曜）

本日は須磨多井の畑の八幡社厄除祭日に當り、恰も余は當

年廿八才にて厄年の由、山口岳父外二三人同行の連中あり、未見の土地にて遠足のため面白かるべしと思ひ同行を約し、京を拉して午前九時過出足す、金子兄へは此旨手紙にて答へ置きたり、參詣人山を成し、汽車の混雜一方ならず、須磨ステ―ションより徒歩にて赴く、途中坂道なれば暑さ甚し、晝飯は怪し氣なる茶店にて認む、歸途須磨寺へ久々に詣り、須磨ステ―ションへ出でしは二時頃なりき、直に發車し歸宅三時前なり、休息の上山口方へ至り、讀み殘しの新紙を見、夕飯を了へて室内の

装置を變更す。

三月二十五日（月曜）今朝店に至る、昨日歸省の筈なりし金子氏、汽船出帆延

引し本日午後四時となる、ために午前より何かとごてごてし、午後などは主母夫人の命にて、金子氏が歸國土産物の手傳などしつ三時頃に至る、長谷川へ電話にて裏地一反を註文し、取寄せて金子兄に贈る、四時金子兄の歸省を本船まで見送り、歸店の上宅へ歸る。

午後六時過店へ出て八時前歸宅す、途次宇佐美へ寄りて閑話す。

四月三日（水曜）午前六時起き出づ、曇天なりしたため心安からて、八時の列車

にて發足、未到の地和歌の浦へ向ふ、梅田着、文五郎來合せ居らざるやを見定め、車して難波に向ひ、同線十時の列車にて和歌山着十二時半、それより車して富士屋に至り晝食を命じ、了つて車を雇ひ、紀三井寺、和歌の浦公園等の勝地を巡視し、夕方歸る沐浴後夕飯を濟まし、散歩の爲め市中を歩く、さして見るものもなければ、勸工場に入りて和歌名勝寫真十一葉を求めたり、歸來藤に入る。

夜半目を覺ませば豪雨篠を衝くの勢なり、和歌の浦の風色、紀三井寺の絶景、積日

の鬱を散じて餘りあり。

七月十七日（水曜） 今朝主人神奈川丸にて歐米漫遊の途に上らる、八時店に出で、小雨を冒して米利堅波止場へ車して至り、直にランチに乗じて本船に着す、見送人二三十人餘、外に金子、柳田二氏は主母夫人と共に門司まで同乗せり、午前十時出帆なれば告別歸店せしは十時半、それより増田氏の依頼により、再製所増築に付て出願書を認めたり、午後三時頃に至りて了り歸途に就く。

後藤民政長官午後八時四十六分神戸ステーション着の筈なり、出迎の爲め一先店に至り、例刻ステーションに至る、長官着神後自由亭に入り、休息の上十時發車にて上京せり、歸宅十時半。

七月二十五日（木曜） 天氣晴 今朝本庄氏方より小包にて、藤樹先生の横物一幅送付し來れり、從來余の愛藏するものと同一種のものにて、眞筆疑ひを容るゝものに非ず、兎も角買入るゝことゝせり、店に至りて本庄、福井二兄へ出狀す、午後新紙を讀み、二時頃より三時まで西岡宅を訪ひ閑談し、三時過より歸宅す、勇藏より禮狀來る、七時再び店に至りて八時歸途に就き、途中宇佐美を訪ひ、寄木の小茶盆丁度

瓶敷に適當したるもの二個、并に銘々盆五枚、メ三點を求めたり。

歸宅九時前、それより山手クラブに至り、十時頃まで盆栽談を爲して歸る。

七月二十七日 (土曜) 本日朝、小竹の二行書一軸を店に持參し、兼て金子兄掛

物缺乏を訴へ居りしゆゑ、兎も角間に合せとして贈る、午前中組合の計算を立て、午後宇佐美を訪ひしに、梅花式寄木瓶敷一枚あり、求めたり。

八月二十二日 (木曜) 今朝石川氏宅を訪うて昨夜話されし書畫を見る、メ八

九點何れも近來稀に見る所のもの、食指動いて禁ずる克はず、兎も角買入の念を仄めかし、午前十一時前歸る、山口岳父も次で來られ共に歸る、店は午前中缺勤す、午後より店に出づ用事なし、床屋へ至り剃髻す、今夜石川氏來訪せられ、今朝の軸物の義に付話ありて歸らる。





故人罹病中手簡の一部



寸啓小生病中無聊なるまゝ、曩に御贈與を受けたる關雪畫伯秋園霜信の一軸を床間に揚げ今更ながら御厚意を感謝致居候

此幅は御承知に有之目下上海にて有名なる吳昌碩の筆に御座候日本の鐵齋に似たる面白き出來の様に存候

最近表裝出來參候間失禮ながら進呈仕度候御叱存願上候 草々頓首

四月十七日

西川文藏

山本竹之助様 貴下

先日来一寸御願申上候關雪畫伯のものは未だ適當のもの御見當無之哉格別取急不申候得共一寸序ながら御尋ね申上候

(病中走り書 缺禮)

拜復御手紙難有拜見關雪の山水一幀御見せ被下多謝近來の作品は如貴說霸氣横溢畫伯の進境見るべきも小生等凡眼にては餘り感服出來不申矢張南畫趣味の津

々たる紙本にても結構水墨にて畫讚に非ざれば面白からず格別山水でなくとも花卉、花鳥又は人物にても差支なく畫讚のものあれば御見せ被下度別段急ぎ不申候不取敢御見せ被下候畫幅は一と先づ御返し申上置候  
草々頓首

四月十九日

西川文藏

山本尊臺

拜復昨日は關雪貳幅御見せ被下樵夫の方題詩一寸面白く候得共人物の出來榮今一息のやう被思申候其内又々格好のもの見當可申一と先づ御返し申上置候  
漁翁の方は近年の作品なるべきも餘り筆力雄健に過ぎ小生には不向に御座候

二十三日朝

西川

山本老臺

拜復關東地方御旅行中京都の御母堂突然の御不幸あり誠に御氣の毒に存候本月  
中廣島へ御引揚に相成候由は拜承罷在候處餘り早き御長逝にて何共御悔みの申  
上やうも無之候

利平氏利三郎氏并に貴兄共打揃ひ不在中突然の御病死眞に遺憾の極みに御座候  
人生は朝露の如しとは申ながら誠に残念に存候

乍併御母堂も貴兄の身の納りを見て一大安心を得られたるものと存候間今後貴  
兄が松代家の爲且は本庄家の爲益奮勵社會に對し相當の貢獻をなされ候事せめ  
てももの孝養に御座候吳々も家名を辱しめざるやう御頼み申上置候

一昨夜利平氏夫妻廣島への歸途御立寄被下色々御話承り申候

京都の方も夫々跡片附出來候趣喜居申候

小生病氣は逐日快方なれ共此疾患の唯一手當は胃を空にするに在り依て今尙十  
分の食を攝取せず來月にも相成候はゞ弗々室内の運動位は許され漸次食物の供  
給も緩和され可申哉に存候

さすれば餘程元氣も出て可申今分の所にては矢張讀書と日光浴と喫煙が日課に

有之僅かに床間の掛幅と瓶花に心神を慰むるのみに御座候餓鬼道の修養も一段の骨折に御座候阿々

御不在中直入先生の遺墨御割愛を願出候も一は病中他に慰安の方法なき爲に外ならず御母堂此頃御上京來二十六七日頃御歸阪の由拜承致候何卒可然御頼み被下度候病中毛筆は嚴禁され居候爲鉛筆の走り書缺禮多謝々々

四月二十四日

西川文藏

松代和四郎君

謹啓小生病氣に付て毎々御尋被下多謝此事に御座候幸ひ經過順調なれ共醫師の嚴戒の下に食物の手當餘程六ヶ敷從て十分の元氣快復の運びに至り不申本月中には多少一陽來復の氣運に向ひ可申と存居候昨今店は中々多忙貴兄の御奮勵察入申候

先日頂戴仕候笛邨先生の遺墨表裝出來上り中々立派に相成大に喜居候御來臨の

機を得て是非御目に掛け申度外に小生先年故先生に御揮毫願候小品を工夫して二枚張條幅に仕立申候餘程面白きものに相成候是亦御目に掛くる機會あるへしと存候此度頂戴せし書畫共全紙物にて立派なれ共一間床には少々大き過ぎるやう被思申候小生の工夫せるものは極めて小品物にて一間床に小さすぎ申候若御手元に故先生の御遺墨中より書幅とすべき尺五見當のもの(森君が頂戴せし位の寸法のもの)一枚頂戴出來候はゞ茅屋の床間一段の光彩を放ち候事と存候御序の時御取調置被下度吳々御頼み申上置候

草々頓首

五月一日

西川文藏

芳川賢兄坐下

此支那三十畫卷は福田眉仙の長卷を寫眞版に附せしもの新聞にて中々評判高く候間試みに買求め申候間一部進呈致候若御寸暇の砌御慰みと相成候はゞ幸甚

病中走筆御免

三十畫卷一部相添



五月一日

神戸 西 川 文 藏

須磨 芳 川 筍 之 助 様

拜啓先日は態々御來車被下笛邨先生遺墨又々御贈與に預り早速表装爲致置候其  
後梅厓先生遺墨二冊御見せ被下餘程利益する所あり昨日岡君より御返璧申上置  
候間御受取下され候事と存候

昨夜北村君よりの托送品御届被下拜受同君へ今朝禮狀差出置候取交せ御禮計申  
上度 草々

小生追々快方乍憚御安神願上候

五月十三日

中山手七丁目

西 川 文 藏

市内西須磨綱引天神社背

芳 川 筍 之 助 様

# 弔

## 辭

- (其一) 大正九年五月廿三日葬儀ニ際シ
- (其二) 大正九年六月十三日五七日法會ニ際シ
- (其三) 各地追悼式ニ於テ



(其一)

弔辭

噫支配人西川文藏君病ヲ以テ逝ケリ享年四十七哀哉君ハ江州今津ノ人明治二十三年滋賀縣商業學校ヲ卒業シ更ニ東京高等商業學校ニ學ブ同二十七年志ヲ立テ、神戸ニ來リ初メテ我鈴木商店ニ入ル實ニ君ガ二十一歳ノ春ナリ君天資温厚身ヲ持スルコト謹嚴夙夜孜々トシテ店務ヲ燮理シ二十有六年一日ノ如ク勵精恪勤終始渝ラズ我鈴木商店ヲシテ克ク今日アルヲ致サシメタルモノ君ガ功與ツテ其多キニ居ラズンバアラズ宜ナリ當店ノ柱石トシテ重キヲ爲シ聲望年ト共ニ加ハレルコトヤ君モト頑健未ダ嘗テ著患ヲ知ラザリシニ輓近漸増ノ激務ニ膺リテ健康ノ如何ヲ顧慮スルニ遑アラズ不幸二豎ノ冒ス所ト爲リ本年三月以來自邸ニ在リテ專ラ靜養ニカム經過良好回復近キニ在ルヲ信セシハ獨リ君自身ノミナラズ予等亦齊シク然ルベキヲ信ジ且其一日モ速カナランコトヲ祈リタリシナリ然

ルニ何ゾ圖ラン本月十四日病狀急變藥石其法ヲ盡セシモ效ナク翌十五日溘焉トシテ長逝ス豈痛恨ニ勝フベケンヤ君平生故舊親朋ニ厚ク自ラ達セント欲シテ先ヅ人ヲ達スルニ力メヌ又能ク人ヲ知リテ善ク任ジ各々其處ヲ得セシメズンバ已マザリキ君ノ訃音一タビ傳ハルヤ内外之ヲ惜マザルナシ又以テ君ノ徳ト才トヲ知ルベキナリ嗚呼宇治山上ノ松籟猶ホ聞クヲ得ベキモ君ガ清秀瀟洒ノ風丰ハ復タ接スルニ由ナシ悲哉本日當善福寺ニ於テ店葬ヲ行フニ蒞ミ哀悼ノ情殊ニ切ナリ英靈幸ニ髣髴トシテ來リ享ケヨ

大正九年五月二十三日

合名會社鈴木商店

鈴木岩治郎

弔辭

合名會社鈴木商店支配人西川文藏君逝ク時ニ大正九年五月十五日享年四十七

噫哀哉君ハ滋賀縣今津ノ人ナリ曾テ東京高商ニ學ビ明治二十七年三月我鈴木商店ニ入り同四十一年二月支配人トナリ以テ今日ニ至ル君平素強健ニシテ精勤眞ニ十年一日ノ如シ兩三年來聊カ健康ヲ害シタリト雖モ猶且衆ニ率先シテ出勤シ退店常ニ人後トナルコト多シ春來衰弱稍加リ三月二十日始テ靜養スルニ決シ爾來專ラ加療セシモ終ニ痊エズ豈傷悼ニ禁フヘケンヤ

君資性高潔ニシテ品行最モ方正恬淡ニシテ寡慾温厚篤實ニシテ至孝且同胞ヲ愛シ自ラ奉スルコト薄クシテ故舊ニ厚ク殊ニ公私ノ區別ヲ明ニシ毫末犯サズ常ニ然諾ヲ守リ約束必ズ實行シ贈答必ズ禮ヲ缺カズ其部下ニ對スルヤ恩義ヲ傾倒シ情理ヲ究極ス其過ヲ責ムルヤ温顔以テ之ニ當リ諄々トシテ釋誨ス是ノ故ニ其人毫モ反感ヲ懷カズシテ悔悟スルニ至ル平素ノ行狀斯ノ如クニシテ君ハ猶且常ニ修養ヲ怠ラザリシナリ想フニ君ノ聰明猶未ダ練達ノ妙諦ニ到ラザルニ安ンゼザリシナルナカラシヤ然リト雖モ君ヲ以テ方今ノ所謂自稱紳士ニ對比セバ眞ニ超然トシテ卓越スルモノアリシナリ而カモ君ハ毫モ紳士ヲ以テ自任スルヲ許サザリキ嗚呼高風清格豈欽仰スヘキニアラズヤ而シテ君今ヤ則チ亡シ寔ニ惜ムヘ

キナリ

君入店以來二十有七年其間百般ノ事務ニ鞅掌シ曾テ一事ノ過誤アルナク一件ノ失策アルナシ特ニ其書翰文ハ一氣呵成千言立ロニ成ルノ慨アリ行文平易輕妙ニシテ詞藻ノ豐富主旨ノ徹底正ニ天下一品ト稱スヘキナリ頭腦明晰ノ士ニアラズンバ焉ンゾ斯ノ如クナルヲ得ンヤ君亦書畫骨董ヲ愛玩シ最モ鑑識アリ珍藏頗ル多シ偶々酒間微醺ヲ帶ビ其十八番岐阜ノ名物ヲ低唱スルヤ恰モ輕風松林ヲ吹クガ如キ情致アリキ嗚呼今ヤ名品深ク藏セラレテ主人ナク岐阜ノ名物空シク存シテ嬌喉亦聞クニ由ナシ眞ニ哀悼ニ堪ヘザルナリ

君二男四女ヲ有シ令嗣猶幼ナリト雖モ夫人貞淑ニシテ夙ニ賢明ノ稱アリ幸ニ以テ瞑スヘキナリ

茲ニ店葬ヲ營ムニ當リ本店職員ヲ代表シ謹テ弔意ヲ表ス尙クハ享ケヨ

大正九年五月二十三日

森

衆

郎

弔 辭

謹テ故西川文藏君ノ英靈ニ告グ曩ニ君ノ病ムヤ神戸ノ自邸ニ在リテ専ラ療養ニ力メラル經過頗ル良好ナリシヲ以テ回復ヲ見ル正ニ近キニ在ルヘキヲ信セシハ獨リ君ノミナラズ我等ノ齊シク期待セシ所ナリ圖ラザリキ本月十四日症狀遽カニ變シ翌朝奄チ長逝セラレントハ痛恨曷ソ禁ヘン君資性謹慤最モ友情ニ篤ク合名會社鈴木商店支配人トシテ久シク具瞻ノ地位ニ在リ德風ノ加ハル所廣クシテ且深シ三千ノ會員訃音ニ接シテ哀惜セサルモノナキハ固ヨリ偶然ニ非ザルナリ本日茲ニ店葬ヲ行ハル、ニ臨ミ景仰ノ情特ニ切ナルモノアリ會員一同ニ代リ敬シク弔ス尙ハクハ英靈髣髴トシテ來リ享ケヨ

大正九年五月二十三日

合名會社鈴木商店濟美會長

鈴木 木 岩 藏



弔詞

嗚呼我無二ノ友西川文藏君逝キヌ君果シテ逝ケルカ我今猶ホ之ヲ信スル能ハズ此ハ夢ニアラズヤ夢ナラバ速ニ醒メヨ嗚呼夢ニアラズ悲イカナ我ノ君ト始メテ相識リシハ二十有七年ノ昔ナリ君時ニ二十一歳ニシテ我ハ君ヨリ長スルコト七歳兄ノ如ク弟ノ如ク形影相伴ヒ終始手ヲ携ヘテ鈴木商店ノ經營ニ從ヒ辛酸ヲ共ニシ勞苦ヲ分テリ而シテ今君ハ我ニ先タチテ逝キヌ悲痛何ゾ勝ヘン

嗚呼君ノ爲人ハ店員一同ノ景慕措ク能ハザリシ所一人トシテ君ノ喪ヲ哭セザル者無シ今此最終ノ訣別ニ會シ誰カ斷腸ノ思ナカラシ

君資性温厚人ニ接スルコト慇懃下僚ヲ遇スルコト懇切ナリ而シテ身ヲ持スル極メテ嚴己ニ薄ウシ人ニ厚ウス是ヲ以テ部下ノ統率力メズシテ能ク行ハレ靄々タル店風自然ニ成リ三千ノ店員皆君ノ徳ヲ仰ギテ其命ニ服セリ加フルニ頭腦ノ明晰ト果斷トヲ以テシ機ニ臨ミ變ニ應シテ取捨ニ惑ハズ裁決流ル、ガ如シ君ノ誠實ト精勤トハ亦實ニ他ノ模範ニシテ終歲殆ンド寧日ナク拮据黽勉店務ニ軌掌

スルコト二十七年眞ニ一日ノ如クナリキ店運大ニ進ミ商勢著シク振興スルニ至  
レル是實ニ君ガ努力ノ賜モノト謂ハザルベカラズ而シテ將來君ノ力ニ待ツモノ  
尠カラザリシニ天壽ヲ假サズ一朝病ニ臥シテ終ニ癒エズ嗚呼悲哉

然レドモ君ノ殘シタル偉大ナル感化ト功績ハ鈴木商店三千人ノ精神ニ宿リテ  
彌々益々其光ヲ輝シ君ノ英魂ハ永久我等ノ間ニ活キテ働クベシ是レ我等ノ省ミ  
テ自ラ勵ミ自ラ慰メント欲スル所又我等ノ君ニ捧グント欲スル微衷ナリ君ノ靈  
尙クハ饗ケヨ

大正九年五月二十三日

金子直吉

弔詞

嗚呼哀哉西川君逝去セラル君ハ滋賀縣高島郡ノ人夙ニ我ガ八幡商業學校ニ學  
ビ尋デ東京ニ遊學シ高等商業學校ノ課程ヲ卒ヘ成績優秀令聞アリ後鈴木商店ニ

入り専心實業ニ從事セラレキ資性温厚實直精力絶倫機ヲ察スル明敏事ヲ處スル流ル、ガ如ク毫モ凝滯アルコトナシ故ヲ以テ衆望ノ歸スル所トナリ常ニ本店樞要ノ任務ヲ擔當セラル本店ノ商運今日ノ隆盛ヲ見ルニ至レルハ蓋シ君ノ力多キニ居ルト謂ハザルベカラズ而シテ將來本店ノ君ニ倚賴スル所尙今日ヨリ偉大ナルモノアリシナラン然ルニ君客年二豎ノ困ムル所トナリ身體違和而モ敢テ意トセズ疾ヲカメテ店務ニ缺掌セラル其精力人ヲシテ驚歎セシムルモノアリキ何ソ圖ラン本年三月ニ至リ病勢次第ニ加ハリ終ニ臥褥ノ已ムナキニ至ラントハ幸ニ一時藥石效アリ殆ド快復ノ運ニ向ヒシモ本月十五日突然急性腹膜炎ヲ發シ醫治效ナク溢焉遠逝セラル天道是カ非カ何ゾ善人ニ福セザルノ甚シキヤ嗚呼哀哉茲ニ遺族諸君ノ爲ニ歎キ將タ本店ノ爲ニ悼ミ更ニ我ガ校有數ノ卒業生其人ヲ失ヒシヲ惜ム噫天ナル哉命ナル哉謹デ一言弔辭ヲ陳ブ慟哭再拜

大正九年五月二十三日

滋賀縣立八幡商業學校近江尙商會

會長 倉 西 松 次 郎

弔 詞

本會會員西川文藏君大正九年五月十五日逝ク洵ニ追悼ノ情ニ堪ヘズ茲ニ恭シク弔意ヲ表ス

大正九年五月十九日

東京高等商業學校同窓會

弔 詞

大正九年五月十五日如水會社員西川文藏君逝ク洵ニ哀悼ノ至ニ堪ヘズ茲ニ謹デ弔意ヲ表ス

大正九年五月十八日

社團法人如水會理事

弔 辭

嗚呼國家ノ富豪ヲ起シ鈴木商家ノ發展ニ偉大ノ功ヲ奏シ夙ニ勵精在勤殊効ヲ

全ウシテ首勳ニ列スル西川君ハ多年一日ノ如ク嚴正清廉ノ名朝野ニ高シ資性温和ニシテ操行端正ナルコトハ胸間常ニ清風明月ヲ蓄フルガ如ク謙讓能ク人ト交リテ信義ヲ重ンジ就中著シク天成忠孝ノ兩全ニ富ム西川文藏君ノ喪ニ驚キ痛惜ノ至ニ禁ヘズ迅速弔電ヲ呈シ今亦營葬ノ典ニ會シ弔詞ヲ陳ネテ茲ニ追悼ノ意ヲ表ス

國富ます道に盡して名をのこす

君こそ御代の鏡なりけれ

大正九年五月二十三日

近江武佐

勳七等 青木清九郎

弔辭

茲ニ謹ミテ脩竹西川文藏君ノ靈前ニ告ス

吾等知ヲ君ニ辱クスルノ輩相語ラヒ年々時々某ノ樓ニ會合シ淺酌低唱談花評

月以テ各開情ヲ暢ベタリ盟友ノ中西牧君先ヅ逝キ今井君山田君山脇君此ニ次ギ  
今春中川君亦相次ギ轉々秋風落寞ノ感ヲ爲セリ幸ニ君ノ在ルアリテ近ク一會ヲ  
モノセンコトヲ期シヌ何ゾ料ラム君亦終ニ卒然トシテ世ヲ辭セントハ乾坤一タ  
ビ轉ジテ幽明相隔ツ君ノ春風ノ襟度今ヤ再ビ相接スベカラズ君ノ秋風ノ雅懷今  
ヤ再ビ相觸ルベカラズ既往ヲ想ヒテ思慕ノ情已ミ難ク哀志綿々トシテ何ノ時ニ  
カ盡キントスラム謹ミテ生前ノ友誼ヲ謝シ且ハ切々ノ弔意ヲ陳ブ

大正九年五月二十三日

前川清 二

## 弔辭

謹デ故鈴木商店支配人西川文藏君ノ英靈ニ告グ

君夙ニ心ヲ商店ノ興隆ニ致シ拮据經營多年渝ルコトナク黽勉畫策貢獻セラレ  
尙ホ將來ニ待ツベキモノ多大ナリシニ不幸ニ豈ノ冒ス所トナリ五月十五日終ニ

溘焉逝去セラル哀惜悲悼ノ情曷ゾ禁ヘン

本日茲ニ壯嚴ナル店葬ノ式典ヲ舉ゲラル、ニ臨ミ鈴木商店下關支店並ニ所管各所員一同ヲ代表シ恭シク哀悼ノ意ヲ表ス

大正九年五月二十三日

西岡貞太郎

弔 辭

謹デ故西川文藏氏ノ靈ニ白ス君ヤ資性温厚言行恭敬悉ク至誠ニ發ス鈴木商店ニ入店以來茲ニ二十有七年ノ久シキ終始一貫奉公道義ヲ以テ淬礪シ謹嚴己ヲ持シ拮据經營其身ヲ忘ル誠ニ鈴木商店現時ノ雄大堅實ナル進展ニ對スル首勳柱石者タリ然ルニ三月下旬君偶々病ヲ得靜養自重其快復近キニアランコトヲ期セシニ當リ壯齡ノ偉才遠大ノ雄圖ヲ抱キテ溘焉トシテ長逝セラル痛惜哀悼ニ堪ヘザルナリ

想フニ天若シ賜フアツテ其壽ヲ全ウセバ乃チ其大業更ニ幾何ゾヤ方今斯界多  
事ニシテ君ノ貢獻ニ待ツモノ頗ル多キニ君既ニ亡シ嗚呼悲哉然レドモ君ガ功績  
ハ不滅ノ好鑑ヲ遺シ其德風遺業ハ炳トシテ鈴木商店今後ノ隆昌ト共ニ長ヘニ光  
明加護ヲ有スルモノアラシ今ヤ茲ニ店葬ヲ以テ祭ラル君亦餘榮アリト謂フベシ  
往事ヲ追想シ敬慕ノ念ヲ禁スル能ハズ茲ニ恭シク哀悼ノ誠意ヲ披瀝シ以テ弔  
辭ト爲ス英靈尙クハ來リ饗ケヨ

大正九年五月二十三日

株式會社神戸製鋼所

常務取締役 田 宮 嘉 右 衛 門

弔 辭

謹デ故西川文藏氏ノ靈ニ白ス君ヤ篤實恪勤ノ資黽勉有爲ノ才ヲ以テ鈴木商店  
ニ入店以來茲ニ二十有七年ノ久シキ至誠上ニ持シ店運ノ發展ヲ圖リ篤行下ニ示



シ店礎ノ鞏固ニ努メ德望最モ重シ即チ現時鈴木商店ノ隆々トシテ其規模ノ實質ト相俟ツテ雄大確固タル斯界ニ炳トシテ偉彩ヲ放ツ所以ノモノ君ガ至誠ノ奉公最モ與テ力アリトス然ルニ君偶々二豎ノ冒ス所トナリ忽焉トシテ不歸ノ客ト爲ル驚愕哀悼何物カ之ニ若カン今ヤ斯界ノ前途君ノ偉才德風ニ待ツモノ誠ニ多キニ當リ天壽ヲ君ニ假サズ春秋ニ富メル身ヲ以テ有爲高潔ノ才德ヲ抱キテ長逝ス嗚呼痛シキ哉花ハ落ツルモ復タ開クノ日アラシク月ハ虧クルモ復タ盈ツルノ時アラシク君一タビ逝キテ何時ノ世ニカ復タ還ルヘキ善福寺頭悲風徒ラニ娑婆タルノミ今靈前ニ拜スルニ及ビテ哀悼極リナシ茲ニ恭シク懷ヲ述ヘ以テ弔辭ニ代フ尙クハ來リ享ケヨ

大正九年五月二十三日

株式會社日沙商會取締役社長  
信越電力株式會社取締役

依 岡 省 輔

誄

詞

大正九年五月廿三日度ミテ鈴木商店支配人西川文藏君ノ英靈ニ告グ君天資温  
恭渾和ナルコト玉ノ如シ明治二十七年鈴木商店ニ入り精勵恪勤店務ニ從ヒ累進  
シテ現職ニ至ル君事ヲ理ムル忠誠ニシテ思慮周密鈴木商店ノ今日ノ隆盛アル蓋  
シ君ノ力亦多キニ居ルト謂フヘシ今ヤ鈴木商店ノ事業ハ海ノ内外ニ普ネク君ノ  
手腕ニ俟ツヘキモノ多カリシニ忽チ白玉樓中ノ人ト爲ル痛惜曷ゾ堪ヘンヤ今茲  
鈴木商店ハ君ガ生前ノ功績ヲ録シ盛大ナル儀典ヲ設ケテ歛葬ノ禮ヲ行フ余等式  
場ニ列リ茲ニ謹ミテ誄詞ヲ呈ス尙クハ饗ケヨ

帝國麥酒株式會社

取締役社長 隅 田 伊 賀 彦

弔

詞

庚申ノ歲五月合名會社鈴木商店重鎮西川文藏君病俄ニ革マリ溢焉トシテ長逝

セラル嗚呼哀哉君ノ事業功績ヲ弔ヘバ永ク鈴木家并ニ合名會社鈴木商店ニ仕ヘ支配人ノ要職ニ在テ今日ノ大ヲ致セルハ卓拔ノ才幹玲瓏ノ人格併セ得ルニ非ザレバ焉ンゾ克ク此ノ如キヲ得ンヤ

今ヤ大戰ノ後ヲ承ケ我財界ハ研鑽劃策大ニ勉ムルノ秋君ノ如キ人材ヲ失フハ獨リ鈴木商店ノ損失ノミナラズ寔ニ國家ノ一大損失ナリ君尙ホ春秋ニ富ム有爲ノ才ヲ抱キ經綸未ダ半ヲ行フニ及ハズシテ逝ク轉タ痛恨ノ情ニ堪ヘズ

茲ニ日本金屬株式會社徳山製鍊所ハ謹デ弔詞ヲ君ノ靈前ニ捧グ冀クハ享ケヨ  
大正九年五月二十三日

日本金屬株式會社徳山製鍊所

主 任 東 郷 文 治 郎

弔

辭

帝國在郷軍人會鈴木商店分會會員二百五名ヲ代表シ謹デ故支配人西川文藏氏

ノ靈ニ白ス顧レバ當分會ハ其成立ヨリ今日ニ至ル間陰ニ陽ニ君ノ援助ヲ受クル所頗ル大ナルモノアリ我等分會員亦戮力協心私カニ之ニ報ユル所アルヲ期セリ何ゾ圖ラン君溘焉トシテ逝カントハ惟フニ世ニ材ヲ求ムレハ君ニ如クモノ或ハ之アラン然レドモ鈴木商店ノ爲メニ材ヲ求ムレバ君ニ如クモノ蓋シ之ナカルヘシ洵ニ痛惜ノ情ニ堪ヘズ我等分會員亦柱石ヲ失ヒ今ヤ倚ルヘキ所ヲ知ラサルニ至ル我等ノ悲ミ何ニカ譬ヘン然リト雖モ君カ鈴木商店ニ盡シタル偉業ニ至リテハ人士ノ齊シク認ムル所分會亦君ノ功績ヲ歴史ニ留メ永ク其德望ヲ仰カントス眞ニ一死國ニ報ユル武夫ノ末期モ以テ君ノ死ニ比スヘクモアラサルナリ悲哉分會トシテ君ノ恩義ノ萬一ニ報ユル所アラズシテ君ヲ亡フ誓フラクハ我分會員鈴木商店ニ力ヲ致スコト君ノ生前ニ比シ勝ルトモ劣ルコトナカルヘキコトヲ是レ亦君ニ報ユルノ微衷ノミ英靈夫レ安セヨ本日君ガ葬儀ノ式ニ列スルニ當リ景仰ノ情止メ難ク弔涙新ナルモノアリ敢テ燕辭ヲ陳シテ哀悼ノ意ヲ表ス

大正九年五月二十三日

帝國在郷軍人會鈴木商店分會長

佐 竹 員 治

弔詞

日本赤十字社終身社員西川文藏氏ノ訃ニ接シ哀悼ニ堪ヘズ茲ニ支部在籍社員ニ代リテ弔意ヲ表ス

大正九年五月二十三日

日本赤十字社兵庫支部長

正四位勳二等 有 吉 忠 一

弔詞

日本海員掖濟會々員西川文藏君逝去ノ報ニ接シ誠ニ痛悼ノ至ニ堪ヘズ茲ニ謹  
テ弔詞ヲ贈呈ス

大正九年五月十八日

日本海員掖濟會兵庫支部長

正四位勳二等 有 吉 忠 一

弔 詞

本會ハ會員西川文藏君ノ訃音ニ接シ哀悼ノ至ニ堪ヘズ茲ニ恭シク弔意ヲ表ス

大正九年五月十八日

日印協會會頭

侯爵 大隈重信

弔 詞

恭シク本會特別會員西川文藏氏ノ御永眠ヲ弔ス

大正九年五月十九日

日露協會

弔 詞

謹ンデ西川文藏氏ノ靈ヲ弔フ氏ハ資性温厚夙ニ實業界ニ身ヲ投ジ一意コレガ

發展ニ努メカタワラ教育事業ニ甚大ノ援助ノ致シ其功績舉ゲテ數フベカラズ今  
ヤ空シク衽席ノ上ニ逝ケリ噫悲シイ哉茲ニ謹ンデ香花ヲ氏ガ靈前ニ供ヘ聊カ靈  
ヲ慰メントス冀クハ饗ケヨ

大正九年五月二十三日

下山手小學校家庭會長

土井長三郎

弔詞

西川文藏君ノ訃音ニ接シ痛哭ノ至ニ堪ヘズ茲ニ虔ミテ哀悼ノ誠意ヲ表ス

大正九年五月二十三日

大谷派本願寺

大阪教務所長 丹

羽

圓

弔 電

謹ミテ御良人ノ御逝去ヲ悼ム 伯爵 柳 原 義 光

御尊父ノ御逝去ヲ悼ム 男 爵 後 藤 新 平

御尊父御不幸御同情ニ堪ヘズ 海軍中將 坂 本 一

外ニ和文弔電五百三十五通、英文弔電五十通(省略)

(其 二)

祭 文

學東西ヲ究メ智衆人ヲ兼ヌルハ常人ノ難シトスル所而シテ之ヲ能クスルハ所謂高材ノ士ナリ利達之ヲ後ニ讓リ艱難我先ツ當ル高材ノ士ト雖モ猶且之ヲ能クセサルナリ唯至誠忠實ノ士ハ即チ然ラス斷然敢行確乎變セス予ヲ以テ之ヲ觀ル故西川文藏君ノ如キ蓋シ其人ナランカ君ノ我鈴木商店ニ於ケル勤績實ニ二十有



六年備サニ辛酸ヲ嘗メテ志彌々堅ク匪勉事ニ從ヒテ終始渝ラス以テ克ク匪躬ノ節ヲ全ウセリ至誠忠實ノ士ニ非スンハ焉ソ能ク是ノ如クナランヤ輓近人情輕薄ニ流レ只利ヲ趁ウテ去就スル者滔々皆是レナルノ時君獨リ嶄然時流ニ異ナリ嗚呼大丈夫タルニ愧チスト謂フヘシ宜ナリ德化ノ及フ所衆其高風ヲ仰ギ健實ナル店風ノ年ト共ニ扶植セラレタルコト然ルニ天年ヲ假サス人生活動ノ高潮期ニ於テ不幸館ヲ捐テ空シク珠玉ヲシテ九泉ニ藏レシム惜イ哉茲ニ五七日ノ法會ヲ營ムニ方リ往事ヲ追懷シテ情ニ禁ヘス謹テ微忱ヲ述ヘテ英靈ニ告ク尙クハ享ケヨ

大正九年六月十三日

合名會社鈴木商店

鈴木岩治郎

弔辭

嗚呼西川うしのみまかり給ひしより早くも三十日とはなりぬ去るもの日々に

疎しとは云ひつれど事に觸れ怛ぶはうしが在りし世の事どもなり臯月の中の三日うしが横濱なる本會員の一人北村和三郎の君に寄せ給へる玉章は後にてうしの此世に於ける名殘の筆と聞きつるが中にも其の病狀を記して「引續き病の床に呻吟し居れど此頃は餘程元氣附きぬ遠からず床上げの爲し得ることゝ樂しみ居り」<sup>と</sup>さへありしに思ひきや我等のすべてが一日も早く癒えませと祈りし甲斐もなく其日より一日おきて十五日の朝あはれ亡き人數に入り給はんとはあまりの事に我等の驚きは譬へんに物なく賤の苧環繰返し歎き悲めども詮なきぞ恨みなるさあれうれしの人と爲りさては其行狀など世にすぐれたるふしの多かるまゝに遺し給へる感化と功績とは深く我等が心の底に宿りて光を輝かし長く我等の間に生きて働くべければ我濟美會員はをのがじし奮ひ起ちていよ々々其業を勵み其事にいそしむらしの志を成すに力めてやあるべき斯くてますます我社の榮ゆくを見給はん時うしも亦おくつきの苔の下よりにこやかに快しとや呼び給ふらん今日しもこゝに五七日の法會を營まるゝにのぞみ會員のすべてに代り懷ふところを述べて御佛に告げ申すになん